

出稼ぎ? 勉強? 観光? 江戸行きをめぐる 語りの世界 (その1)

—下水内郡栄村調査報告3—

Edoiki: a Sakae-mura Category of Migration

中村博一*

Hirokazu Nakamura

はじめに

移動 migration の人類学的研究は経済的側面ばかりではなく移動にともなう社会関係や文化的意味の広がりにも注目してきた〔例えば Cohen 1969〕。長老や首長の権威から若者が逃げだし、自律しながら現金や連れ合いを手に入れるといったリネージ内の政治的関係や家族の発展サイクルから移動の発生はしばしば説明され、また世帯の権威関係がそのまま移動先での組織化の基準に流用される事例も報告されてきた [Eades 1987:8]。従来より住民の移動性の高いことで知られる西アフリカでは特に、都市論やエスニシティなどととも移動は大きな研究テーマのひとつだったといえる。

1988年から89年にかけてわたしはニジェール南部からナイジェリア北部へ広がるハウサランドに滞在する機会をえたが、ここでも移動はハウサ文化のハビトゥスと理解することができよう。この地域の移動慣行は「ダンディ歩き yawon dandi」「乾期を食べる cin rani」など多様なエミック・カテゴリーに分節されている¹⁾。「ダンディ歩き」を分析した Olofson はダンディの起源について諸説を述べるなかで「許可を得ずに両親の家を離れた」人々との関連性を示唆する。親族の相互関係がきついといわれるハウサ社会の日常的な束縛から解放された個人が自由を手に入れ、時には憑霊

カルト bori への入信 (癒しのプロセス) へいたる「ダンディ歩き」の文化的意味を広く肯定的に解釈している [Olofson 1976a, 1976b]。

この小論ではこうした西アフリカのエミック・カテゴリーとしてみた移動研究の視点をもとに、長野県下水内郡栄村の季節の出稼ぎであった「江戸行き」の聞き書き資料をとりあげる。以下では江戸行きを文化的意味の広がりを検討してみた。

栄村は上信越国境に面した山村である。1997年現在の人口は約2900人、魚沼地方に隣接するコシヒカリの産地としても、キノコやトマトの産地としても有名である。例年数メートルに達する深雪地ながらも道路環境の整備によって村外で暮らす子供達も両親の生活を見守れるようになってきている²⁾。現在では出稼ぎに出るむらびとは少ない。

出稼ぎの目

むろん季節的移動慣行は出稼ぎとは限らない。千葉らは本州中部の「牛首乞食」「袖乞い」の冬季の構造的放浪について経済的側面ではなく宗教的性格を指摘した [千葉・三枝1983]。この慣行は今世紀初頭で消滅し、資料もあまり残されていないので聞き書きの手法によりその姿を再構成せざるをえない。そのとき語りの文脈自体は出発点であると同時に再構成の枠組となるはずだ。しか

*非常勤講師

しながらいわゆる出稼ぎ慣行にはむらをめぐるステレオタイプが大量に幾重にもまとわりついており、出稼ぎは負の記号として読まれやすい。このため各地の出稼ぎ慣行が新鮮な驚きとともに再発見されたとしても例えば出稼ぎという定義をなぞって出稼ぎを見る目にはその特殊な文脈の見えにくさや「見そこない〔アルチュセール1996:34〕は常に潜在しているのではないかと思われる〔島1991参照〕。

出稼ぎ概念を、あきらかにエミック・カテゴリーとしての「出稼ぎ」から考察した安達はメディアや行政で流通した社会問題の「出稼ぎ」とむらびとの使用する「出稼ぎ」のずれに注目する〔安達1973〕。「農家が「出稼ぎ」という言葉をそのような広い意味で使っているということは、農家の主人、息子、主婦などは、もともと自家の農業や家事作業に従事しているのが正常なのであって、自己の農業経営や家事の外に出て稼ぐのは異常な状態だ、という認識を踏まえてはじめて出てくる考えなのだ〔前掲書:203〕。このようなずらしの背後には、むらびとから出稼ぎと分類されるような農業以外の生計の立て方すべてが、むらを浸食する要因と見る安達の深い問題意識がある。しかし「稼ぎ仕事」は近世の農家では習慣として構造的に生活に組み込まれた不可欠な生計手段だったという指摘に従うなら〔深谷・川鍋1988〕、むらの崩壊との関連でむらびとの出稼ぎ概念を捉える安達のすぐれた視角もむら崩壊という危機を目前にしていたがゆえの読みすぎと考えられなくもない。本稿では暫定的にむらびとの生活に深く根ざしたハビトゥスとして江戸行きという出稼ぎを視野に入れ、「構造を構造化するように機能するためにしむけられ構造化された構造〔Bourdieu 1977:72〕」としてむらの日常実践行為として組み込まれたむらを生み出す出稼ぎを考える立場をとりたい〔守田1978:47-51参照、cf. Strauss 1992:16〕。ただし出稼ぎのすべてが構造的だとあらかじめ前提するならまたも自ら「見ることによって見ない」結果を招くことになる。

本稿でとりあげる江戸行きという出稼ぎ慣行は後に見るように多義的であり、むらびとの語りにおいて江戸行き・出稼ぎなどと表象される生活習慣は時間的空間的にまた個人的に変異するかもし

れないのだということも忘れないようにしよう。同じ言葉で表現されるゆえに差異が見えにくく、違う言葉のために同じ文脈が見えにくい可能性に留意が必要だろう。StrathernやHastrupが分析したように、過去とのつながりを保持しようとすることによって急激な変化が生まれることも、変化が読めなくなることもあるのだ〔Strathern 1992:3, Hastrup 1995:107-17〕。自分自身と他者の偏見(表象)を分析するのが人類学の問題系であるのなら、村人(同土)の出稼ぎ観とわたし(たち)の出稼ぎ観の間に微妙に揺れる江戸行きを想定すべきであろう〔Herzfeld 1992, Rosaldo 1989:127〕。したがって本稿では江戸行きの振幅を知ることが肝要であり、その際の方法としてはむらびと自身の出稼ぎ観や社会観を生み出すような語り丁寧に接近することがやはり不可欠であろう。

江戸行きをめぐる言説

江戸行きとは何か。駒形により『高志路』誌上に報告された江戸行きは新潟県中魚沼の出稼ぎ習慣として広く知られるようになった〔駒形1957〕。最近では同じ妻有地方の十日町市史資料編が以下のように俯瞰的に記述している。

「いうまでもなく、この言葉は江戸が東京に変わる前の言い方だが、東京になってからも言い方は、「東京へ行く」とか「冬稼ぎ」と言い換えても昭和の初期ごろまでは、江戸行きの慣習としての姿を残していた。これは、秋始末が片付くころになると気の合った若者たちが申し合わせて江戸へ冬働きに出て行くことであった。それは、いまもある出稼ぎの前身のようなことではあったが、当時のそれは特に未婚のいわば小若い衆、娘たちが主体であって、今の出稼ぎのように現金収入を唯一の目的とするものではなかった。せめて雪中の農閑の時期の徒食の無駄を少なくする口減らしであり、多少なり収入を得ることであったが、それにもまして、江戸へ出て見聞を広め、他人の飯を食うことで人生経験を深めることを暗黙のうちに求めたもので、辺地に育った若者にとって修行の旅であり、大人になるための一種の通過儀礼であった〔十日町市史編さん委員会1995:145〕。

この記述によると江戸行きは晩秋から冬にかけ

ての未婚の若者の出稼ぎ慣行であり、経済的性格と同時に研修や修行という教育的意義を伴う通過儀礼であったと読める。

十日町・中魚沼地方に隣接する長野県下水内郡栄村でも江戸行きは報告されており⁹⁾、学校を卒業した(アガッタ)子供達の多くは冬季間東京で働いた。この季節労働は男性は徴兵検査、女性は結婚でひと区切りとなった。江戸行き(エドユキ、イドイキ)・出稼ぎ(デカセギ)・冬稼ぎ(フユカセギ)・冬働き(フユバタラク)などという。「秋の十月から十一月にかけて十五歳から十八歳ぐらいの年齢の、主に少年達の間に家人の許しもなく東京に冬働きに出かけてしまう風習があった。この家出には女子でも実行するものがあった」「これは江戸に逃げるとか江戸行きとかよばれている[栄村教育委員会1972:55]」。江戸行きという表現は現在では50代以上でないとなかなか理解されず、30代以下にはほとんど存在しないといってよい。その代わりに出稼ぎの語は世代を超えて通用する。そのためしばしば混乱が生じることがある。本稿の資料の多くは大正はじめから昭和10年代までに生まれた話者からえられた。しかし、江戸行きの実態を生きるという意味ではそれ以後の若い世代ももちろん対象となりうる。

江戸行きの語られ方

冬の栄村の生活習慣の聞き書きをはじめた頃はミノヅクリやナワナイのような冬仕事と冬稼ぎの区別がつかなかったためにわたしは「冬仕事はしたことがありますか?」と尋ねまわった。話者がこちらの意図を斟酌して下さるのを繰り返すうちに、江戸行きについて尋ねる場合「冬仕事」では不適切であるとわかり、金取り(カネトリ)のために出て働く「冬稼ぎはしたことがありますか?」と次第に聞くようになった。同様な意味で冬働きともいうこともあるが、冬稼ぎや冬働きは地元での発電所や営林署の金取り仕事も含むような広い言葉なので、さらに「江戸ゆきについて話して下さい」と聞くまでになった。だが話者自身が冬稼ぎや出稼ぎといいかえてしまうこともしばしばあったので、彼らの人生のなかで江戸行きが特殊な稼ぎの文脈として他の金取り仕事とはっきり

区別されているのかは微妙であり、個人の意味づけに大きく左右されると思われる。わたしの問いに対する答えとは以下の例のようである。

「中村:おばさんも江戸にいったことありますか?」「へえ何十年も経つよ、東京へ、昔はこの辺ねヨメにいかない前はよほどザイバツの人の子供でなければ、東京へいかねなんねえように、みんながいくからいかないしているとヒトメガワルイ(恥ずかしい)のね昔しゃ、それでいきましたよ(大正7年生女)」。

このような語る行為としての江戸行きにはわずかにその特徴を見いだすことができる。ジュネットは物語に含まれる三つの概念を区別するなかで「物語る行為の重要性」を述べた[ジュネット1985:15-6]。人類学者 Tonkin は特に口頭による過去の語り方をとりあげているが、言説の習慣 conventions に着目する[Tonkin1992:2]。わたしには江戸行きのインタビューをはじめた頃にある種のとまどいを感じながら話者を訪ね歩いた記憶がある。江戸行きの話をしてほしい旨のこちらの意図が伝わると、話者が同じように「いきたくて、いきたくて」と話しはじめたからであった。むろん聞き書きの話題をあらかじめ予告したわけではない。ところがいく先々で「いきたくて、いきたくて」の表現を話者は呪文のように繰り返したのだ。他の出稼ぎの語りには「いきたくて、いきたくて」は出てこない。この不思議なとまどいの経験は江戸行きという語りの習慣やある様式が話者の間に存在するかもしれないとわたしに気づかせた。

桜井は差別の記憶の語りにおけるこのような様式性を報告している[中野・桜井1995:245-7]。共通の様式は「体験を語る象徴的な用語法と理解すべき」なのであり、個人と共同性の接点に様式化は位置している。そしてこの立場からは語りの用語法(コード)をもつコミュニティが前提される[前掲書同頁]。江戸行きの場合にはどのような語りの「コミュニティ」ないしは語りの場が存在する(した)のだろうか。この問いは大きくふたつに分けて考えることができよう。

ひとつは桜井の示唆するような経験者同士が語り理解し合うコミュニティや影響を与える運動団体といった、個的な経験を共約化する場である

う。この点についてわたしは同世代の集まりの機会を尋ねてみたが、同級会などで話すものなどいないと答えた話者がいた。しかしなんらかの形で同じ経験をしたもの同士が語らう機会はあると思われる。戦時中に軍需工場で働いた女性達は時折、診療所の待合室で出会うという。その際当時の思い出を語り合う。彼女達は東京ではなく名古屋の近郊で昭和19年秋から20年にかけて風船爆弾などをつくりながら一冬を過ごしたのだが、ほとんど共通して焼夷弾の落ちる場面を細かく描写する。これには強烈な経験を共有し、今でもそれについて話す機会をもてることが作用していると思われる。

そしてもうひとつは経験者が帰郷してから家族や親戚や友人（そしてわたしのような聞き手）とともに土産話や思い出として語る場であろう。異文化を他人に語る語りとしての江戸行きを語る場といってもよい。このふたつの場で繰り返し語りながら、江戸行きの語りは様式化し、江戸行きは（再）生産されるのではないかというのがわたしの暫定的な考えだが、特に帰郷後の語りはさらなる江戸行きを引き起こす誘因の憧れの対象としての東京を生み出したと考えられる〔cf. Hastrup 1995 : 114、宮本1984b参照〕。

帰郷時の土産話としての江戸行きについては、「江戸行きが帰ってくるっつお」「江戸行きが帰ってきた」という定型化された表現が象徴するように儀礼的な帰郷の文脈での想定が可能であろう。実は、帰郷時に自分の経験を語ったり人の経験を聞いたりしたのを具体的に記憶する話者はあまりいないのだが、きまった土産を配る習慣が江戸行きには伴っていたからである。土産とは主に絵紙（エガミ）と白砂糖（江戸行き砂糖、花見砂糖という話者がいる）である〔栄村公民館1986（1964 : 2）、十日町市史編さん委員会1995 : 146参照〕。絵紙は花魁道中や浅草や二重橋などの美しい絵を印刷したものだ。はじめて江戸へいったものが買ってきて親戚へ配ったのだという話者と毎回買ってきたという話者がいる。昭和の初期までは絵紙を土産にしたが、年代的には白砂糖よりも早く姿を消している。大正10年前後の生まれの話者になると受けとった経験はあるが配ったことはない。砂糖については配ったのが明確な最後の資料は現在

までの調査では太平洋戦争中のものである。こうした土産は幼い頃もらって自分も「大きくなってそうしてもってきたい（昭和3年生女）」と思った話者がおり、その際に東京での体験を聞いたものと推察される。

なお思い出としての江戸行きの語りの行為は珍しくはなく、その語りを聞いた個人の語りのなかに登場する。例えば次のようである。「あの前の（家の大正7年生まれの）ジイちゃんなんかよくケイアン（江戸行きの際の周旋屋）の話する。二三日（働き先に）いっていやになってくるとそのケイアンのおじさんがすごくおっかなかったとか（60代女性）。「（明治32年生の）おらの親は寿司屋のご飯たきにいったんだって、ほうしたらご飯たくのがじょうずだってほめられたんだって（昭和5年生女）」。本稿の調査資料となった江戸行きのほとんどは、しばしば懐かしいと口に出されながら思い出としてわたしに語られるか、私を前に語られたものである。

身体化する江戸行き

近年は移動する人々といわゆる郷里の双方を研究対象に入れることが一般的になりつつある。江戸行きについても江戸行きにいく側と江戸行きを送り出し迎える側の語りの区別は有効であろう。前節では土産をもらい自分も江戸にいきたいと思った話者を引用したが、江戸行きから帰ってきた若者達はむらびとの目にどう映ったのだろうか。彼らは語りのなかでどう表象されるのだろうか。江戸行きの特徴には肌の色の違いが上がる。「そうそう、顔が白くてさ、江戸帰りだてんでさ（大正15年生男）。「おら冬うちはまあで雪が降って日光が強いから真っ黒になってると、同じ年頃のがちょっと帰ってきて真っ白になって鳥打ち帽かぶって行李しょってくるのがうらやましくてなあ（大正9年生男）。「春4月になって帰ってきたんだけどあんただって旅からきたんだし、この土地の人間と旅の人間と顔のイロサナが違っておった。都会からきたというつまあんで江戸行きというんで顔が真っ白でさ、今あんなに白いのはねえかと思うさ……今あんな白さ東京からきたってあんな白い人は、あんまり違わないぞここだってなあ（大正3年生男）」。江戸行き帰りの若者の描写に

おいては服装以上に、その肌の白さが強調される。しかもその白さは桁違いだというのが共通した語り口である。

では帰郷したものにはむらびとはどう見えたのか。「この土地の人間なんまるで真っ黒みてんな顔しておったよ、そうだ黒い顔しておったね、てことは栄養も悪いし、生の薪たいておったろ、あれがやっぱり顔にしみ込んだんじゃないかな……年中煙っておったからさ、あれ色しみついておったんだと思う(大正3年生男)」。大正生まれの女性は、帰郷時に駅まで迎えに出てくれた家人の顔が真っ黒で目だけがざらざら光っていたと笑った。

江戸行きは出稼ぎである前に身体を驚くほど白く変えてしまう(漂白の)旅(漂泊)と捉えられていることがわかる。むらびとと自分の肌の色が決定的に差異化される旅だったのだ。それと同時に都会の言葉を覚えてくるのもまた江戸行きの特徴であった。「いいかんなん(しばらくし)たら言葉をいろいろ覚えててまあ話しらん(するの)に言葉を使わんで(使うんだよ)(大正14年女)」。言葉で困ったり、驚いたと語る話者は多い。「あの頃商店は奥さんなんていわないでオカミさんオカミさんていった、こっちはね(むらでは)、今カアチャンなんていうでも、おらのころはオットウオッカアとってたから、なんでオッカアにオカミさんなんて、なんでそっけなこといわんだ(そんなこというのだろう)、オカミさんが出てきたらお願いしますっていえってそうすけ(いうので)、そっけにオッカアのことオカミさんなんていわないだろと思っただけんそ(だよ)、ほんと山んなかでいったからねえ、そんなのいったことはねんだもん(大正10年生女)」。東京で働いてどのような言葉を具体的に覚えてきたのか情報は少ない。だがこれは愚問かもしれない。話者の江戸行きの体験談のなかに挿入された都会の人々の語りとは実は江戸行きで覚えた都会の言葉を端的に示しているからだ。「そのうちへ連れて行って「あの女中を連れてきましたから見て下さい」てんで(といて)オカミさんがじっと見ててな、おら困ってこっけに(こうしている)、「ああお願いしますよ」ってこうやんだ(大正7年生女)。「元旦の日に「ネエヤこれがオキ

セだから着て遊びな」なんてってねえ、オキセというのわかんないけどもきつと給料の他にこしらえてくれたんだかどういうんだか(大正8年生女)」。自分の言葉と都会の言葉を交互に語る話者もいる。戦時中の食糧不足の際に下宿先でサツマイモを見つけた話しをした女性は「「おらにもちようだいよ」「それがあんた達にあげたいけどねあたしたちも」「あちゃそっけな話にゃいんね(ええそんな話ならいらぬわ)」なんて(大正13年生女)」と語る。

肌の色や言葉をはじめとして自分の身についたものに距離をとることに栄村の話者は敏感である。「ここの言葉は悪くて」「おらばかだすけ」「新潟の人はまじめだ」とはインタビューの現場で何度も出会う表現である。「こりゃ言葉がわりいし、ばかにされるし(大正3年生男)」。こうした言葉などの比較の意識は常に感じられる。花を生けたのに気がつくかどうか、むらに暮らし続ける意味に気がつくかどうか、わたし自身はしばしば試験を受けている錯覚におちいる。「あんたここへきてどう思う?(明治40年代生男)」。だがこれは錯覚ではないかもしれない。隣接する群馬県側の六合村調査ではこうした相対化が気になることはなかった。むしろ、都会との相違が小さいことが強調された。また現在調査を実施している中信地方のある地域では言葉が悪いという表現は出てこない。話者も地元の言葉が悪いなど聞いたことがないという。今のところわたしは江戸行きという移動がこのような意味づけや反省を生み出す過程と多少なりとも関係したのではないかと考えている。特に人生のなかで唯一江戸行きだけがむらの外部の生活を知る機会だった70代80代の多くの女性の話者にとっては都会との出会いは自分の言葉やむらの生活を都会の目で周縁化する重要な契機になりえたのではないかと思われる〔宮本1984b:115-20参照〕。

土産を携え、こざっぱりとした姿で真っ白な顔になって江戸の言葉を覚えてくる江戸行きを見ては話者達は東京に憧れたという。では当時の若者はどのように江戸へ出ていったのだろうか。前述のように「家人の許しもなく」出かけてしまい「江戸に逃げる」のは江戸行きの特徴であったとされる〔栄村教育委員会1972:55〕。

江戸逃げ、逃亡の多義性

十日町でも江戸行きは別に江戸逃げといわれ「その出発の仕方が親や親族の目を隠れて夜逃げ同様に歩いていくからであった〔十日町市史編さん委員会1995:146〕」。中魚沼地方の江戸行きを広く紹介した駒形は若者の一人前の通過儀礼として江戸行きを解釈し、逃亡という形態をその特徴としてあげる〔駒形1957〕。逃亡行為と社会については既に、さまざまな危機に直面した際の社会に組み込まれた「逃げる」行為の意味を船曳が考察しているが〔船曳1996〕⁴⁾、駒形の報告する中魚沼地方では江戸行きの逃亡行為は危機というよりも習慣としての規範的な性格が強調されるように思われる。しかしながら逃亡という形態がなぜ選択されるのかについては明確ではない。駒形の資料の文脈についてははっきりとはわからないが、十日町・中魚沼地域の江戸行きがしばしば逃亡の形態をとることは、個人史的な記事におけるエピソードとして散見されるのでかなり日常化していたのではないと思われる。「我々の時代には「東京へ逃げられないようじゃ、一人前じゃねえ」と言われていたんそ〔十日町市企画人事課広報広聴係1995:9〕」。

十日町・中魚沼地方における江戸行きの勲章ないしは徴表としての逃亡は、栄村では一人前の条件として語られない。一人前ということではむしろ「そうだな、出ないもんはなかなかあ一人前じゃないみたいで、でないと家でごろごろしてる恥ずかしいような感じなんだよ、一人前というか普通の若者なら冬前にちゃんと行って勉強したり、冬(お金)ためたり、帰りにはなんか買ってきたりというようなあの頃の考え方じゃないの(大正14年生男)」と逃亡ではなく都会へ出ることが普通の若者の行為として語られるのみだ。

逃亡事例自体は比較的簡単に耳にすることができる。中魚沼・十日町と栄村の逃亡の性格の相違について60代の男性は「やっぱり商売どころはな、人にもまれなければいい商売はできねえからな、こっちは山んなかのもんは」あまり派手になってはいけなかったのではないかと語る。商売の盛んな場所では教育的配慮からそうしなければならなかったのであり、栄村では非行に走るのでは

ないかという親の危惧から、逃亡を一人前の条件と考えなかったのではないかと説明した。また昔の方が逃亡は多かったと時代的な相違を述べる話者もいる。栄村での逃亡の語りの振幅は以下のようである。

「中村：江戸へ逃げられないと一人前じゃないということは?」「そういうことはいわないが一日も早くいかなけりゃいいところ(働く場所)がなくなっちゃうから、(秋始末が遅れると)友達と相談して逃げた、帰ってきて怒られたということはないし、親がいかせないということでもなかった(大正7年生男)」。しかし、親が許さなかったから逃げたと語る話者もいる。「おらも(うちの人が)出さないなんていうからね、隠れて山越して汽車に乗っていったことがある。弟とサツマイモ掘りいくてんで(というので)。21歳頃だよね。弟はいくら山へ行ってイモ掘ってたって姉ちゃんがこない。どうしたって山へいって出たんだもん、いかねえはずはねえ、こねえ……荷物のあるところを見たら、ちゃんと整理してあるし、駅へいったんだろう、やらないやらないといったんだから、それで是非いきたくて、隠れていっちゃったんだろうって、そういうこともあったね、憧れていくんだよね、冬はみんないくでしょう、だから一人だから家へ残ったってしょうがないでしょう(大正7年生女)。「そうだね東京へ1回は逃げてってねえ、2回目には「やらねえとまた逃げてく」すったら(いったら)、2回目にはやって(許して)くれて、うちの人がかわいがっちゃって長く(東京に)おけないんですよ、ジイサンバアサンがあまりにもかわいがって、もう2月頃帰ってきたなあ(大正9年生男)。「いきたいという、いくなという親がいて、それでいきたくて困って友達と示し合わせて夜中にこっそり家を抜け出して、それおらのおぶくろの話なんだ明治34年生まれ、親たちはいくなというのに友達がいくんだ年格好同じぐらいのが「いくんだ、いくんだ」という「いかねかって」、それでこっそり抜け出して戸狩の辺りいくともう心細くなって汽車がなくて歩いて行って、後ろから家のものが迎えにきてくれないかなあ、また後ろを見、また後ろを見、また後ろを見ながら前進してって戸狩へ着くというところんだそこから馬車

が……東京までいっちゃうと今度は帰ってこられねえ（大正14年生男）。江戸行きは逃亡形態は認められてもこのように多様な経験から一貫した解釈を引き出すのは困難に見える。

民俗学者の宮本は故郷の山口県大島における奉公のエミミック・カテゴリーを報告している〔宮本1984a〕。そのうち女中奉公へと娘が逃げる習慣について、もともと家計を助けるための奉公が逃亡という形態をとった理由を検討している。宮本の深く厚い記述によるとその逃亡の背後には娘への母の愛があるという。その記述からは親が公的には許さない／娘が逃亡するという女中奉公の形態はむらに戻るためのある種のモラルを逃がした娘の内部に生み出す条件であると読める〔前掲書：29-30〕。「出奔形式から親の承認の形で出て行く有様になった。親が許して出て行った女たちは自らの親に対する責任感もうすらいで、もはや戻って田舎の人たちとは結婚しようとはしなくなった〔前掲書：32〕」のだ。

栄村の江戸行きでは親に承諾をえた若者も春になると当然むらに戻るものと思っていたと語る。江戸行き最中に縁談をもちかけられた経験を語る女性の話者は少なくはないが、帰郷する以外の選択は自分の心にはなかったようである⁶⁾。逃げなくとも帰郷するつもりであった。江戸行きの語りではしばしば本人を呼び戻すための嘘の「チチキトク、ハハキトク」の電報が定型化され、笑いを誘うネタになっている。実際に電報が打たれたかどうかはあいまいだが、これは年間を通じて雇いたい主人を振り切って帰郷する季節的移動としての江戸行きを象徴するいい回しである。また東京で一生暮らそうと決心してむらを出ていったオジ（弟）の語りもこうした江戸行きとは異なるものだ⁶⁾。

しかし、宮本の解釈の位相にしたがう事例もある。大正3年生まれのアキオ（仮名）さんは親への反抗として逃亡を試みた。「家のもんはへえやらねえから隠れていったんだけどさ、隠れて逃げたってんだけど」「中村：隠れて行って怒られませんかでした？」「いや怒られるこっつお（怒られるさ）、怒られるよりはもういっちなまえば迎えにきねえからさ、おらうちのオヤジ酔っぱらいで本当になあー、酒癖が悪いんで学校終わって6年生

だっけ、高等科へいかないうちに一度逃げたことあるな、おれ暴動みたいなこと好きだったなあ」。父親が困るなら、なんだってやるつもりで逃げた。酒飲みの親への反抗としての逃亡である。しかし、アキオさんは嫌いな父親がいる家を捨てて都会で生きる道を選ばずに江戸行きから必ず戻ってきた。その理由は「おふくろが、酒飲みのオヤジでいじめられらんで（るので）ついうちへきたくなる。いじめられたりしねかなあ、なんて思ってたさ……まあ女親に引かれてくるというもんだなあ」「中村：もしそういうことがなければ出たかもしれない？」「ああ、比較してみりゃどっちが得だらうのことはわかるもん」。宮本が示唆したような奉公にまつわる母の愛は、父親から母を守りたいという屈折した形で見いだすことができるのだ。文化を記憶と捉える人類学者 Climo は、若い頃に親元を離れて自分の生活の場をつくり結婚した子供達を北米で調査したが、その子供達が現在抱く感情の多様性を指摘し、説明するため個人的経験の記憶を用いている〔Climo 1995〕。そこには親への憎悪など様々な感情が潜在している。江戸行きに伴う逃亡の意味をさらに深く検討するにはそうした厚いライフヒストリーを利用することが重要になるだろう。

ところで、親から許しをえたものも含め話者自身は江戸行きの目的や評価についてはかなり明確な解釈をおこなっている。そのうち2点について述べてみたい。

勉強と江戸行き

江戸行きの目的を尋ねると勉強のためという返答が多い。語りにおける学習、修業（修行）、修養のニュアンスは重要だと思われる。「かわいい子には旅をさせよ」の諺を引用する話者も少なくはない。このような広い意味での教育的広がりをもつ移動については例えば、越後から東京方面などへの季節的移動である毒消し売りの報告をした豊原は、この出稼ぎの経済的側面というよりも「由緒と傳統」つまり文化としての慣習的側面を強調し、花嫁学校の意味を伴う毒消し売りの移動（旅）に言及している〔豊原1943：77-81〕。また宮本は（社会変化にさらされている）村社会がもつ既存のカテゴリーや習慣の教育効果を積極的に

評価した〔宮本1984a〕。もともと学校教育と家郷の躰とのズレの苦悩から民俗学徒となった宮本は「村人が移り行く時勢に対して古い伝統をもつていかに処していったか」を見ようとしたが、女中奉公の経済的意味の変化とともに、世間を知らない娘は嫁のもらいてがないといった語りを紹介し、物参りや奉公の文化的教育的意義にも触れている〔前掲書：22-32、1984b：105-24〕。

江戸行きもまた、世間や行儀作法を学び、見聞を広める文脈でしばしば語られる。20歳前「まだ向学心のある頃、夢があつていった、勉強したかったのが目的だったから（明治40年代生男）。このように話者が高等教育機関への進学を語っているのか冬稼ぎの江戸行きを語っているのかがわたしにははっきりせず混乱する場合がしばしばあったが、江戸行きの経験には教養旅行のような学び知るための移動だという自覚がかなり強力に存在したのではないかと推察される〔高知尾1994：52-5参照〕。たった何ヶ月かの滞在のなかにすら人生観に影響を及ぼすほどの出会いもあった。

サキさん（仮名、大正13年生女）は海軍大佐の家の女中として一冬を過ごした。「陸奥という船をつくった横須賀の神様という人だけどいい人なの、サキちゃんサキちゃんといってくれたけど、朝は自分で庭の掃除をしていた、ものを大切に人びびりしたし、結婚いらい自分のパンツでも奥さんに洗わせないぐらい考えてる人で、贅沢しないで食べ物を大切に、かといって栄養のことはちゃんと考えている、まったくあの旦那さんにはわたしはまあいろいろ教えられたことがいっぱいあったね。」

また、嫁入り前の花嫁学校としての江戸行きの性格が紡績工場での労働経験と対照的に語られる事例がある。大正3年生まれ的女性アキさん（仮名）は尋常小学校6年を卒業して3年紡績工場へ勤務した。帰郷した年の秋に「どうしても嫁にきてくれてんで（というので）、おれはまあどこにも何もしたこたねえからね、ちったあ東京へ一年（冬）ぐらいいってさ、お茶碗の洗うことぐらい習ってこなければ工場というのは茶碗洗うのハッ洗うのなんていらねえんだから、ただ食べば」「炊事も人がやってくれる、だからまあ茶碗洗うぐらいちったあ覚えなけりゃ嫁なんていかなね

えなんて、昔のしょう（親）はいったんだがな。それをしてからだてんが（というのに）、どうしても嫁に来てくれてんで、それじゃ今年はいったということにしても冬はどうしても東京へ一年やってもらわなきゃだめだ、東京へやってくれてんでここへ来たわけ」。東京へ一冬働きにいく条件でアキさんは嫁になった。嫁なので普通なら村の子供の多くの落ち着き先である飲食店で働くことは嫁ぎ先から許されず、勤め人の家で女中をした。「10月13日にここへ（嫁に）きたんだ、そうして11月の26日か、おやじ（夫）と2人して東京に出てきたんだ。オヤジだって若いんさ、ちょうど同級生で」「中村：それは若い2人ですね」「うん若い2人（笑い）東京へいったけど。このしょう（シュウト達）は早く帰ってこい、早く帰ってこいとまあんでいうもんで、3月になったらもう帰ってきたんだ」「でもさあわたしはまあちっとは習わなければ、ちったあタニンノツトメしなければあちゃ、人んとこへ嫁にいったって困るじゃないねえ、だから東京いってそうしてヒトニツカワレてそうしてっからと思った」。江戸行きの経験者でタニンの飯を食わなければだめだと語る話者は実に多い。アキさんの語りは最低限の嫁の条件を満たす目的での江戸行きである。その社会化という性格からすれば、通過儀礼というよりも広い実践的な訓練の機会と考えるべきだろうが、彼女の江戸行きは実家や嫁ぎ先ではない離れた東京のタニンのところでいったんツトメ、試練を経ることこそが一人前（の嫁）になる道なのだと読める〔原・我妻1974：1-6頁参照〕。

このようなタニンのところで苦勞を経験する意義を親から聞いたのを記憶する話者は多い。次の会話は、親のたてまえとしての江戸行きの裏側にクチベランというもうひとつの江戸行きが子供にも見えていたことを示している。「A：出稼ぎなんておらの頃は奉公なんていってた（大正5年生女）」「B：奉公にちったあやってタニンの飯を食わせなきゃだめだなんていってな（大正14年生女）」「A：そだって（そうやって）怒られてなあ、ウチにいりゃわがままになる（といって）（笑い）」「中村：じゃあ親も反対しなかった？」「A：そう親の方がかえって、あの頃大きくなればクチベランだ……米だっていっぱあるわけじゃ

ねんだから」。学校を卒業した子供が江戸行きや紡績で働く理由としてのクチペラの語りは当時のむらの生活のある部分を表している。「その頃の貧乏は一回や二回の貧乏じゃないの(大正2年生女)」。戦時中つとめ先から帰郷せざるをえず「帰ってこなきゃいいのになんて親に怒られてさ(昭和5年生女)」と切ない記憶を語る話者もいる。

観光と江戸行き

最後に見物や遊びとしての江戸行きについて簡単に述べておきたい。一家の大黒柱が冬季間出稼ぎに出るようになった昭和30年代から40年代にかけて出稼ぎは特に社会問題として論じられるようになる。栄村公民館報は出稼ぎ懇談会などの特集を組んだ。そのなかに出稼ぎの意味の変化に触れている記事がある。「昔は観光を兼ねて働きに出た人が多かったが、生活費の増加にともない家計が苦しいから収入をあげたいというようになった[栄村公民館1986(1968:3)]」。江戸行きが勉強や修業やクチペラの労働としてだけでなく観光や娯楽や遊びの性格をも帯びていたことは、江戸行きの代わりとして東京見物を語る話者がいることから明らかである。「親が(奉公へ)いかせたくないから東京見物へ連れていってもらった(明治38年生女)」。

男性の場合は「徴兵検査前に1、2回ぐらいいきって出た人が多いようだけど、それは遊びかたがたいったんだからうちへそんなに金を持ってくるというんじゃない(大正9年生男)」。「冬中うちいたってしょうがねえや東京へいっていけえなんて(いわれて)近所の米屋があつてニソクやれてんでさ、冬うち遊んで、給料はおれうちきたとき全部ちっともないんだ(明治41年生男)」。また、戦後は就職前の猶予期間という意味合いが大きい。「鳩ヶ谷へいって人がいて誘われていった(酒屋で)2畳ほどのところに酒の箱を積んでいて部屋なんかなかった、遊びにいったんだからお金なんかもってこなかった、自分で使ってしまった(昭和13年生男)」。

女性は結婚前の特別な期間を意識していた。このような意識は少なくとも昭和35年頃までは存在した。「24ぐらいのときここへ(嫁に)きたんだから……帰ってくるときはさ、もうほらここへ

(嫁に)こなくちゃいけないでしょ、もうこれで一生東京へはこられないと思ってきた(昭和11年生女)」。

見物の対象は戦前は絵紙で見た名所、浅草、宮城、靖国神社などであった。もらった絵紙はメディアの役割を果たし、子供達が絵紙や土産話から空想としての東京をつくり上げていたのは確かである。そのイメージと自分が見た東京のずれに失望を感じたこともあったからだ。「A:まあ宮城の前いったとき二重橋二重橋っていうだろ、それでわたしら子供の頃は東京へいって稼ぎにいった人が春帰ってくると、あの絵紙というのくれるんだよね、そうすると二重橋なんか赤くあれ(着色)してあつてきれいな橋になってらん(るん)だよね、だけどあの二重橋見たときだけはびっくりした(大正14年生女)」「B:がっかりしたてな(大正5年生女)」「中村:がっかりした?」「A:だってその昔の絵紙というのしか知らないんだもん、だから本当に赤くきれいな橋だと思つていたのがコンクリの橋でらなんでらな」「B:今時あつてな橋はねえやなこの辺に」「A:今かかった橋(天神橋)の方がよっぽど似てる(笑い)」。

その他に娯楽としては、僅かな休日に映画やレビューを見たという話者が多い。「まあ若いうちいったのはまあほれ、遊びたいという考えがあつたからね、映画の一つもみたくか(大正9年生男)」。見物と同じぐらいい語りに現れるのは都会の食べ物の記憶である。「食べ物にしても何にしてもいいからやっぱし向こうへいきたいんね(大正2年生女)」。「ちらし寿司というのを食べたんだな、それが忘れられない、おかみさんの残したのをもらって食べたいようだった(笑い)はじめて食べたから(大正10年生女)」。「風呂に入った真似してラーメン食べてきた、うんやっぱしラーメンなんて珍しいんだろえ(大正2年生女)」。「友達がはじめてそこから買ってきたドラヤキをもらって食べてみたら焼きたてなんがうまかつた(大正5年生男)」。「その頃おらあ大福なんて食つたこたあねえから、ひとつ食べれば5円(銭)だつて(大正9年生男)」。「こうしたうまい話を聞いて東京をめざした子供達は多い。しかし、食料の統制が行われるようになると、東京で

の経験は味気ないものになっていく。この変化については別の機会に述べることにする。

終わりにかえて

本稿では江戸行きをめぐる語り注目してエミック・カテゴリーとしての江戸行きの多義的な側面からほんの一部をとりあげてみた⁷⁾。俯瞰的な制度の記述ではなかなかみとれないこうしたむらびと個人々の経験は従来は規範論に対する過程的アプローチのなかで議論されてきた。フィリピンのイロンゴット族を調査した Rosaldo は首狩りをめぐる語りを分析する上で古典的基準では隠されてしまうような面を明らかにする過程的アプローチの重要性をあらためて強調している [Rosaldo 1989: 128-9]。

江戸行きは基本的に個人的経験である。むろん江戸行きを制度的にあるいは体系的典型的に語る話者がいることは否定できないし、そうした語りがわれわれが江戸行きを知る上で不可欠な俯瞰図になることは事実だ。しかしながら、わたしが出会った江戸行きの語りのほとんどは語り手自身の江戸行きであり、語り手がまさに過程的に経験し、繰り返し語らうなかで構成されたはずの江戸行きだ。話者は江戸行き帰りがどんなに真っ白で、どんなに都会へいきたかったか、はじめの夜はどんなにさみしかったか、友達同士の子守がどんなに楽しかったかを語った。本稿の構成上避けられなかったが、これらの語りをすべて規範的な記述に変換させるなら、個人的な体験としてこそその江戸行きの特性や複雑な移動の文脈を消し去ることになるだろう。あるむらびとはとりまとめをいそぐような受け答えをしたわたしに警告している。「そっけなあたりがあんたがたが調査して歩く場合になんていうかなあ……いう人（語り手）のほとんどの思いとあんたがたのあれが（思いが）……ずれてしまう（昭和5年生男）」。そしてこの個人的な体験の語りやまた、むらの共同性や歴史的变化を見ようとするものに重要な手がかりを与えてきたことは周知の通りである。

(1997. 7. 12 受理)

註

1) エミック・カテゴリーとは Olofson の表現であ

り、ここでは特定の文化の文脈における移動カテゴリーということだ [Olofson 1976a]。文化を内側から見るという戦略の虚構があげられ、現在用いるものもあまりないエミックをあえて流用する理由は、移動の研究において暗黙の出稼ぎ理解が成立しているように思われるからである。

- 2) 柴村調査は1990年より埼玉大学文化人類学研究会のご好意で実現した。病人のわたしを寛大に受け入れて下さった柴村の方々に深謝したい。また東大AA研の松下周二教授はハウサ関係の文献閲覧を快く許可して下さい。重ねて感謝する次第である。江戸行きについての聞き書きは94年晩秋から97年3月までに秋山を除く地区で実施しているが、住民同士が親しい社会での極めて個人的な経験のために集落その他ほとんどの固有名は匿名・仮名にする [ラングネス・フランク1993: 169-70参照]。
- 3) 行き先としては江戸（東京）が圧倒的だが、名古屋や大阪で働いたものもある。
- 4) 船曳は調査地での体験から、モラルとしての逃亡について触れている [船曳1996]。ハウサランドの「ダンディ歩き」ではいわゆる日常的秩序や負債からの解放と夜逃げや逃亡の形態は表裏一体であるようだ [Olofson 1976a]。
- 5) ただし勤め先で結婚した例は皆無ではなかったという。
- 6) 資料が少ないため、オジと東京については今後の調査を待ちたい [前山1981参照]。
- 7) 本稿における語りの編集はすべてわたしの責任である [cf. Hastrup 1992: 122]。

文献

- 安達生恒1973『むらと人間の崩壊』三一書房
 アルチュセール、ルイ他1996『資本論を読む 上』
 (今村仁司訳) 筑摩文庫
 Bourdieu, P. 1977 *Outline of a Theory of Practice*.
 Cambridge U. P..
 Callaway, H. 1992 "Ethnography and Experience."
 In Okely, J. & Callaway, H. (eds) pp.29-49.
 千葉徳爾・三枝幸裕 1983「中部日本白山麓住民の季節的放浪慣行」『国立民族学博物館研究報告 8巻2号』253-306頁。
 Climo, J. J. 1995 "Leaving Home: Memories of Distant-Living Children." In Climo, J. J. & Teski, M. C. (eds) *The Labyrinth of Memory*.
 Bergin & Garvey. pp.13-26.
 Cohen, A. 1969 *Custom and Politics in Urban Africa*. Univ. of California Press.
 Eades, J. (ed.) 1987 *Migrants, Workers, and the Social Order*. London: Tavistock.

- 船曳健夫 1996「危機のモラル」小林・船曳（編）『知のモラル』東大出版会193-208頁
- 深谷克己・川鍋定男1988『江戸時代の諸稼ぎ』農山漁村文化協会
- 原ひろこ・我妻洋 1974『しつけ』弘文堂
- Hastrup, K. 1992 "Writing Ethnography." In Okely, J. & Callaway, H. (eds) pp.116-33.
- 1995 *A Passage to Anthropology*. Routledge.
- Herzfeld, M. 1992 "La pratique des stéréotypes." *L'Homme* 121:67-77
- ジュネット、ジュラル 1985『物語のディスクール』（花輪・和泉訳）書肆風の薔薇
- 駒形尅 1957「江戸行きと青年式 中魚沼の出稼ぎの形態」『高志路173号』26-29頁
- 前山隆 1981『非相続者の精神史』御茶の水書房
- 宮本常一 1984a (1943)『家郷の訓』岩波文庫
- 1984b (1960)『忘れられた日本人』岩波文庫
- 守田志郎 1978『文化の転回』朝日新聞社
- 中野卓・桜井厚（編）1995『ライフヒストリーの社会学』弘文堂
- Okely, J. & Callaway, H. (eds) 1992 *Anthropology & Autobiography*. Routledge.
- Olofson, H. 1976a "Yawon Dandi: A Hausa Category of Migration." *Africa* 46-1:66-79.
- 1976b *Funtua*. Ph. D. Diss., Univ. of Pittsburgh.
- ラングネス、L. L. ・フランク、G. 1993『ライフヒストリー研究入門』（米山・小林訳）ミネルヴァ書房
- Rosaldo, R. 1989 *Culture & Truth: the Remaking of Social Analysis*. Beacon Press.
- 栄村公民館（編）1986『栄村公民館報縮刷版』栄村公民館
- 栄村教育委員会（編）1972『栄村の民俗 第1集 冬と生活』下水内郡栄村教育委員会
- 島利栄子1991『山国からやってきた海苔商人』郷土出版社
- Strathern, M. 1992 *After Nature*. Cambridge U. P..
- Strauss, C. 1992 "Models and Motives." In D'Andrade, R. & Strauss, C. (eds) *Human Motives and Cultural Models*. Cambridge U. P.. pp. 1-20.
- 高知尾仁 1994『表象のオリエント』東外大 AA 研
- 十日町市企画人事課広報聴係（編）1995『市報とおかまち 463』十日町市役所
- 十日町市史編さん委員会（編）1995『十日町市史 資料編8 民俗』十日町市役所
- Tonkin, E. 1992 *Narrating Our Pasts*. Cambridge U. P..
- 豊原又男 1943『職業紹介事業の變遷』財団法人職業協会